



談話における形容詞の対人関係調整機能 : 「いい」の振る舞いから

著者	西内 沙恵
雑誌名	筑波応用言語学研究
巻	26
ページ	30-43
発行年	2020-01-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/00159576

談話における形容詞の対人関係調整機能

－「いい」の振る舞いから－

西内 沙恵

キーワード：形容詞、評価性、マイナスの待遇表現、対人関係調整機能

1. 本稿の背景と目的

本稿は、話し手と聞き手の関係性を暗示する形容詞の振る舞いから、談話における対人関係調整機能を論じる。「忙しい」や「悪い」が聞き手に丁寧な印象を与えないことが石黒（2017）や齋藤（2017）で指摘されている。「上手」や「いい」も同様に、目上に使うべきではないことが柴田（2005）や清水（2013）で取り上げられている。具体的には、断りに際して（1a）のような発話は、話し手の配慮が十全でないとされる。石黒（2017）は、「忙しい」だけでなく、（1b）のように具体的な理由をあげ、断ることを推奨している。また、（2a）が発話された場面として、話し手が聞き手より目上の状況が想起される。齋藤（2017）は、（2b）のように依頼することを勧めている。目下が目上に（2a）を発話した場合、不遜な印象を与えるだろう。

- (1) a. 今忙しいんです。
b. 今パソコンがウイルスに感染してて忙しいんです。（石黒 2017：125 下線は筆者による）
- (2) a. 悪いんですけど、手伝ってくれますか。
b. 申し訳ないんですけど、手伝ってくれますか。

（齋藤 2017：40-41, 54-57 下線は筆者による）

日本語の形容詞使用におけるこのような談話上の制限は、「上手」の使用特徴とも関連すると考えられる。日本語教科書の清水（2013）は、（3）が聞き手の先生に失礼になると注意している。目上の人物の能力や実績をほめることで、自分が評価できる立場にいる、ひいては自分は目下ではないというメッセージが伝わるためだと説明している。但し、仕事や専門以外の趣味などをほめる場合は例外であり、テニスが趣味の上司に「課長はテニスが本当にお上手ですね。」（清水 2013：140）というのは失礼にあたらないという。柴田（2005）は、「上手」は大人が子どもをほめる言葉であるため、（4a）のように美化語にしても失礼になるとしている。（4b）のように、「いい」でも同様に失礼だという。聞き手はからかわれたように感じてムッとするだろうと述べ、（4c）、（4d）のようにオーバーになっても率直にほめることを推奨している。

- (3) 今日の授業はとてもよかったですよ。（清水 2013：140 下線は筆者による）
- (4) a. 課長、お上手ですね！
b. 課長、よかったですよ。
c. 課長の腕前には感服いたしました。
d. お見事です。（柴田 2005：80 下線は筆者による）

では、形容詞が談話上に現れることで、なぜヒエラルキーが暗示されるのか。清水（2013）は仕事・専門以外の趣味などについて述べる場合は失礼にあたらないとし、柴田（2005）は仕事・専門に限定せず目上に使うと失礼になるとしており、説明に違いが見られる。形容詞が醸す不遜さの問題について、現象に基づく注意喚起は多くなされてきたが、その規則と要因については合意に至っていない。本稿では、評価性が前面に表れるタイプに分類される形容詞（Dixon 2004, 八亀 2003）を扱うことで、統一的な説明を試みる。次節以降で、このタイプに属する代表的な形容詞「いい¹」を題材に、語のレベルと談話のレベルにおける振る舞いを観察する。該当の現象を談話ルールの上で上げることが視野に、コーパスを用いて「いい」が実例でどのように使用されているかを調査することで、対人関係調整機能の実証を行う。

2. 「いい」を語レベルで扱う先行研究

類型論研究の Dixon（2004）は、形容詞という品詞を言語に積極的に認めるとき、次元性（DIMENSION）・経年（AGE）・価値（VALUE）・色彩（COLOUR）の4つの意味要素が普遍的に取り出せることを論じている。価値の意味要素に分類される形容詞には、*good*（いい）、*bad*（悪い）、*lovely*（愛らしい）、*atrocious*（極悪非道な）、*perfect*（完璧な）、*proper(/real)*（真の）などが含まれる（Dixon 2004: 4）。これらは、日本語でも評価性が前面に表れる表現であり（八亀 2003）、形容詞・形容動詞・連体詞にあたる。価値の意味要素に代表的な形容詞「いい」を取り上げ、語レベルでの特徴を辞書と先行研究から確認していく。

2.1 メタ表現に見る「いい」の多様な側面

「いい」の対人関係調整機能を調べる談話分析に先立ち、語レベルの扱われ方を概観する。飛田・浅田（1991）は、「いい」に次の意味を立てている。＜望ましい・好ましい様子＞の下位に、「いい時計」などの＜上質＞、「いい女」などの＜魅力的＞、「いいところのお嬢さん」などの＜由緒ある＞、「いい人」などの＜善良さ＞、「仲がいい」などの＜親密さ＞の意味を区分している。「いい」の意味のメタ説明は被修飾名詞によってさまざまであることが見てとれる。また、「いい気味」、「いい年」などの表現で＜反語として、望ましくない様子＞が表されることにも言及している。辞典であるため、読み手に向けた利便性が考慮され、文法的に特殊な用法や異質に感じられる意味用法に区分と詳細な説明が設けられている。

統語情報・形態情報・意味情報について、用例とともに詳細に記述する計算機用日本語基本辞書『IPAL』の意味記述も見ておく。『IPAL』は、対象の属性や状態を表す＜良否＞、＜適不適＞、＜要不要＞と、知覚主体の感情を表す＜願望＞、＜羨望＞に区分した上で、さらに14もの意味分類項目を仔細に設けている。このうち＜良否＞は、「形」などの＜ある側面が優れている＞、「センス」などが＜器用で洗練されている＞、「相性」などの＜関係などがうまくいっている＞を含み、そのメタ表現は限りがないようである。

¹ 「いい」は、「よい」という交替形を持つが、2つの形式に実質的な意味の違いは認められない（山田 2000）。「いい」はほぼすべての位相で使用されるのに対し、「よい」は改まった場面や態度で使われる。この特徴から、本稿では、より中立的な「いい」の表記を採用する。漢字では、「良い」、「好い」、「善い」の表記の書き分けがあるが、意図的に使い分けられたり任意に選択されたりする点で異なる語とは認められず、表記ゆれの範囲を出ない。

2.2 「いい」のスキマティックな意味

前節に見た「いい」の多様な側面は、Katz (1966) の「good の意味は、ほかの語、表現の概念内容と結びつくことなしには意味をなさない。」という言及からも読みとれる。山田 (2000) は、「いい」の解釈の多様さについて、描写される名詞の性質を観点に諸用法の意味関係を細やかに分析しながら、関係しあうスキマティックな意味を規定している。形容詞の意味解釈について、描写される名詞の意味特徴に応じて呼応する語義が選ばれると考えるとき、比較的容易に意味が取りだせる語もあるが、「いい」はその限りでない。(5) のように、同じ人間を表す名詞を修飾しても、「いい」の意味解釈は一樣ではない。それぞれの名詞に呼応する「いい」の意味は異なっているように見える。また、「いい立て看板」という句の意味をインフォーマント調査すると、文脈を与えて初めて解釈が可能になるという。このほか、「いい暮らし」という表現でも＜裕福な＞暮らしだけでなく、文脈に応じて＜趣深い＞暮らしという解釈も可能になる。慣習化された解釈と、文脈と結びついて臨時的にもたらされる個々の解釈があることから、山田 (2000) はこれらを包括し構成する中心的な要素として、＜受け入れる＞という概念の関わりを提起している。

- (5) a. いい人＜善良な＞ b. いい男＜顔立ちがきれいな＞
c. いい女＜容姿が魅力的な＞ d. いい子＜従順な＞

(山田 2000 : 126 下線と＜＞内の意味説明は筆者による。)

述語用法である「N が C にいい」、「C にいい N」という形式では、「体にいい野菜」のように、C に求められる条件を N が満たすことが表される。但し、条件を満たすことで＜受け入れられる＞のか、＜受け入れられる＞ことが条件を満たす要件になっているのか、という点が循環する。しかし、根底には＜受け入れられる＞という特徴がある点が強調される。このほか、「N は P がいい」のような二重主語文や「P のいい N」という形式で、N の部分や属性である P を取りあげて肯定的評価を述べる用法も、やはり＜受け入れられる＞ことに関連する。また、(5) にあげたような、社会的な共通尺度が人々に共有され慣習化している肯定的評価も、＜受け入れられる＞ことから導かれる。以上、「いい」のいずれの諸用法も＜受け入れられる＞という中心的な要素と関連していることが見てとれる。なお、(6) は、＜必要ない＞、＜いらない＞という一見すると本来の意味と反対に否定的評価を表す。しかし、これも話し手にとって対象が＜十分である＞、＜足りている＞から＜必要ない＞、＜いらない＞のだと考えることで、＜受け入れられる＞という意味と異なるものではないことがわかる。

- (6) (コーヒーを飲もうとする相手に)「ミルクいる?」「いいよ。」(文末下降調で)

(山田 2000 : 126 下線は筆者による。)

山田 (2000) は、(5) のような慣習的な用法を認め、(6) のような一見反対の意味を表す用法について検討しながら、「いい」のスキマティックな意味を明らかにした。また、慣習的でない意味については、文脈と結びついて臨時的に個々の解釈がもたらされると考えているが、この点についても＜受け入れられる＞の延長にあると想定できる。

2.3 「いい」の意味分類

「good の意味は、ほかの語、表現の概念内容と結びつくことなしには意味をなさない。」という Katz (1966) の指摘から、山田 (2000) は、最大公約数的に「いい」の意味の全体性を捉えることで議論を発展させた。西内 (2018) は、山田 (2000) と梶浦 (2013) を参考に、「いい」の意味を分類した。くびき語法とテモイイ構文から<上質>、<適切>、<許可>の 3 つの意味を区分する試みである。<上質>は、「品質」のほかに「成績」などの客観的な評価尺度がある対象に用いられる。<適切>は、「味」、「香り」、「気持ち」など、ある話し手の評価とほかの話し手の評価が必ずしも一致しない対象に用いられる。

くびき語法によって別義を認定する例が (7) である。くびき語法は、カテゴリーの異なる複数の語を無理に 1 つの述語で受ける言語操作で矛盾感を引き起こし、特殊な効果をねらう修辞技法である (中村 1991)。いいかえると、統辞的ないし意味的要請からは異質な 2 つ以上の要素が結びつけられ、共通因数がくくりだされることによって、その効果が発揮される。(7a) では、オフィスチェアもソファも<上質>であるという読みが、それぞれの品質という共通因数から可能である。一方、<上質>読みと<適切>読みの両方の解釈を試みる (7b) は、両者に共通因数を認めることができない。このことから、<上質>と<適切>は別義であると認定できる。

- (7) a. このオフィスチェアも、あのソファもいい<上質>。
b. このオフィスチェアも、あのソファもいい<上質 / * (研究室に置くのに) 適切>。
(西内 2018 : 19 を参考に改変)

次に、テモイイ構文における「いい」の意味を見ていく。高梨 (2010) によれば、テモイイ構文は肯定的評価をベースに<許可>、<意向>、<許容>、<後悔>、<不満>といった行為の発動に関わる機能がある。テモ構文では表れない、「いい」の素材的な意味として<許可>がテモイイ構文で表れることに着目する。<意向>、<後悔>、<不満>は、評価のモダリティ表現が特定のファクターのもとに使われるとき広く見られる用法であり (高梨 2010)、「いい」に根ざした用法ではないと考えられる。例えば、「といい」、「ほうがいい」のような「いい」が含まれる表現や、「なくてはいけない」などのほかの評価モダリティ形式でも当該事態が非実現の場合に<後悔>、<不満>が表される。このことから、<許可>が、テモ構文では見られずテモイイ構文で逸脱的に現れ、「いい」の意味用法に根ざしているといえる。(8) のように、構成要素の倒置、構成要素間への語句の挿入、「条件接続形式テモの並列機能」を引き継ぐ構成要素の文法的性質の継承が可能であることから、テモイイ構文の文法化の度合いの低さが見てとれる。文法化の度合いの低さからも、テモイイ構文の逸脱用法の成立には、「いい」の語義が関係している可能性がうかがえる。<許可>の用法は、上述の<上質>と<適切>に並ぶ主要素に位置付けられる。

- (8) a. いいですよ、来ても。(構成要素の倒置)
b. 来ても多分いいよ。(構成要素間への語句の挿入)
c. この学校では制服を着ても私服を着てもいい。(文法的性質の継承) (西内 2018 : 21)

以上より、「いい」の語義のうち＜許可＞の用法は、承諾を与えるという権限の必要性によって目下から目上に発話しにくいルールを提供していると説明可能である。では、＜許可＞以外の＜上質＞、＜適切＞であれば目下からも使いやすいただろうか。談話レベルでのルール構築を視野に、語レベルでの使われ方を観察し、対人関係調整においてどのように機能しているかを探る。

3. 「いい」の使用実態の調査

「上手」などで指摘されてきた、失礼かそうでないかは、日本語母語話者間でも感覚に差がある。実際の使用を観察することで、形容詞使用における対人関係調整機能を検討する。上下関係がある話者間の談話における「いい」の使用実態を『談話資料 日常生活のことば』から調査した。

3.1 コーパスと本稿の調査について

『談話資料 日常生活のことば』は、現代日本語の日常的な話し言葉の実態を知ることが目的に、現代日本語研究会によって収集された談話データとそれに基づく研究成果である。2011 年から 2014 年に、首都圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）に在住ないし 5, 6 歳から 12, 13 歳までの言語形成期を首都圏で過ごした 10 代から 90 代の男女 31 名から採録されている。談話データは、自宅・職場・外出先での 96 場面、合計 17 時間 38 分の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。なお、話し手は、緩やかな条件で選ばれており、話し手の個性も念頭において分析する必要があるとされる（小林 2016）。しかしながら、このコーパスの 2 つの大きな特徴である①話者の背景・話者間の関係の明記と、②発話者の年代の広さは、本稿の調査に理想的である。談話の採録後フェイスシートをもとに人間関係の確認が詳細に行われており、録音された音声とフェイスシートの人物が厳密に一致している点は、目上か目下かという関係性を観点に分析する上で重要である。また、参加者の年代が幅広い点も、多様な対人関係を考察するのに有用である。

3.2 調査結果と分析

本稿では、仕事での序列・専門性・年齢による上下関係のある対人間で「いい」がどのように使用されるかを調査した。調査にあたって、まず文字列検索により「いい」を抽出し、「かわいい」、「いっぱいいい」などを除いた²。次に、年齢差のある同僚同士・上司と部下・客と店員・先生と学生・執筆講師と編集者・娘の習い事の先生と母親という上下関係のある話者間の談話を調べた。上下関係は、役職・専門性・年齢から判断した。以上により得られた 11 場面の「いい」144 件を疑問・引用・評価の 3 つの出現タイプに（9）の手順で分けた。談話中の下線は筆者による。

- (9) a. (10a) のような疑問：「か」もしくは「？」の疑問のマーカーが付いている発話。疑問のマーカーがない場合でも、疑問詞を含む「でしょうね」や、末尾が「ね↑」のように同意を求める形式で、聞き手から「うんうん」、「そうです」などの応答がある談話も含む。「かな」、「かもしれない」など自問する形式をとっているものも含めた。
- b. (10b) のような引用：引用符が用いられている発話。引用符がない場合でも「と言う」など話し手以外の発話であることがわかる引用のマーカーを伴う発話も含めている。
- c. (10c) のような評価：（9a）と（9b）以外の発話。

² 「良い」などの別表記も検索したが、別表記による入力にはデータに含まれていなかった。

- (10) a. <少し間>これはどうしたらいい（=いい）んですか？<笑い>。
 （場面番号 30f103 発話文番号 83）
- b. もう企画書を出してくださいって言（い）われて、「企画書って、これ以上、何（なに）書けばいいの」【引用部は口調を変えて】って。（場面番号 50f103 発話文番号 147）
- c. いつも思うんだけどさー、学生に、学生があそこで何（なん）かやってもさー、さ、最後掃除させりゃあいいのに、★させな//。（場面番号 30f103 発話文番号 186）

疑問は、聞き手の許可や評価を求める点で対人関係調整に中立的に働くと思われる。また、話し手が自身に自問する発話も、聞き手に直接的に向かう発話ではないため、対人関係調整に関与しないと考えられる。引用されている「いい」も話し手が発話したものではなく、この場にはいない人物の発話であるため除くこととした。本稿では、疑問と引用として使われた「いい」を除いて残った、話し手の評価として使用された「いい」を分析する。分類した結果を表1に示す。

【表1】調査対象の場面と出現タイプ

関係と場面番号		用法	疑問	引用	評価		総計
					述定	装定・連語	
年齢差のある 同僚同士	30F103		4	1	5	0	10
	50F201		0	1	1	2	4
上司と部下	20F202		1	2	3	6	12
	40F202		3	0	6	1	10
客と店員	30F201		7	0	7	0	14
	50F301		1	0	6	1	8
	50F302		0	3	2	0	5
執筆講師と編集者	40F203		11	0	8	2	21
先生と学生	50F103		4	4	4	1	13
	50F303		3	0	14	3	20
娘の先生と母	50F203		7	4	15	1	27
合計			41	15	71	17	144

評価として使用された「いい」の用法は、述定と装定・連語に分類した。「いい大人」、「いい友達」、「いい意味」、「いい音」、「いい時間帯」などの装定と、「面倒見がいい」という個々の要素の意味から全体の意味がすぐわかり、語と語の結びつき方が決まっている連語(国広 1997)である。装定と連語は、固定的な使用であり、対人関係調整に作用しないと考えられるため、以降では述定で使われた発話を観察する。

文字化は、佐竹(2016)に則って整備されたデータをそのまま使用している。調査協力者のIDは、先頭の大文字アルファベットが話し手の区別になっており、2桁の数字は話し手の年代である。末尾のアルファベットはfが女性、mが男性であることを示している。

3.2.1 目上から目下で使用された「いい」

まず、述定で使用された「いい」のうち、目上から目下への発話を見ていく。(11)は、調査協力者A20fの職場である呉服店で、A20f・A20fの同僚B40f・A20fとB40fの上司C50f、3名の雑談である。上司C50fが部下B40fが食事を取ることを「いい」と許可している。

(11) 目上→目下<許可>

C50f ご飯は？↑、[B40f 姓] さん＝。

C50f ＝まだ大丈夫？↑、★＃＃＃＃。

B40f →うん、食べたい←んですけどー//。

C50f うん、★行 (い) っといで (＝行っておいで)。

B40f →何 (なん) か←。

C50f 全然いいよ、二人いるんだもん。

(場面番号 20F202 発話文番号 267-272)

続いて、(12) は、出版企画営業担当の A40f・執筆者の講師 4 人 (B40f, C40f, E40f, F40f)・編集委託先の担当編集者 D50f, 6 名による英語教材の編集打ち合わせである。年齢は D50f が最も上だが、出版物の内容を作成・推敲する責任は執筆者 4 名にあり、グループ内での専門性は B40f, C40f, E40f, F40f が上位だと想定される。なお、A40f と執筆者 4 名との親疎は普通である。A40f が相槌に「うーんー」とあまり丁寧でない表現を使用しているが、年上の同僚がいるほかの場面 (40f201) でも同様の相槌を使っており、口癖だと思われる。(12) は、目上の B40f と C40f が英語教材ドリルのリスニング部分の構成について検討している場面である。構成上、不要な部分を採用しないことを「いい」を用いて<許可>している。

(12) 目上→目下<許可>

C40f →ファーストバージョンは←ヒップホップ、セカンドバージョンはジャズ★とか、そ、そういう余裕のあるのが//。

B40f →2 回目出す時、「わたしは」とか入 (い) ←れなくていいもんね。

C40f 入 (い) れなくていい。

B40f 日本語 (にほんご) 入 (い) れ {うん [C40f]} なくていいもんね {うーんー [A40f]}。

E40f でも//。

F40m 最初に出す時は、「わたしは」とか入 (い) れ★るんですね。

E40f →絶対入 (い) れ← {ねえ [不明 f]} ないと分からないですよ {うーんー [A40f]} ね。

B40f ここ、だって、書かせてるもん、ちゃんと {うん [不明 f]} 日本語 (にほんご) 付けて {うん [不明 f]}。

(場面番号 40F203 発話文番号 236-243)

(13) は、中学教員の A50f・A50f 娘の舞の相弟子 B50f・A50f 娘の舞の先生 C50f, 3 名が発表会の衣装について雑談を交えながら相談している場面である。全員同年代だが、舞の専門性から C50f が最も目上だと考えられる。C50f が A50f の娘が着る衣装の柄について「いい」と評価している。

(13) 目上→目下<適切>

B50f →でも、それだったら、ほんとに←ちゃんとね↑ {はい [A50f]}、も (＝もう) お襦袢 (じゅばん) も作ってー {はい [A50f]}、★ぴったり//。

C50f →そしたら←、襦袢 (じゅばん) も桜の小紋か何 (なん) かにしたらいい。

A50f 桜のねえー＝。

C50f ＝うん＝。

(場面番号 50F203 発話文番号 207-218)

(14) は、大学教員の同僚 2 名による研究室での雑談である。ボーナスの使い道や出張旅費の建て替えについて一通り話した後、依頼された時間分談話を収録するために新しい話題で談話を継続する場面である。年上の B50m が自身の服の嗜好について安いことを＜適切＞と評価している。

(14) 目上→目下＜適切＞

A30f 似たようなのを続けますか？↑。

A30f じゃあー＜沈黙＞好きな服のブランド＜笑い＞。

B50m 僕、ブランドないから、別に、何（なん）でも、とにかく安く買えればいい。

B50m じゃあー、好きな音楽について。

A30f ＜沈黙 4 秒＞あ、わたしですか？↑。

B50m 僕は語れないし。 (場面番号 30F103 発話文番号 139-144)

(15) は、職場の部署で進行中の企画・休暇連絡・クレーム対応について 4 名で会議している場面である。A40f は最も年上で、B30f、C40f、D20f は A40f の部下である。受注料金の説明をどのように表記すべきか相談しており、目上の A40f が＜適切＞な方向性を提示している。

(15) 目上→目下＜適切＞

C40f →そう←、本体価格で {うーん [B30f]}、外税のほうが一 {うんー [A40f]}、あの一、後々（のちのち）集計をした時に、ちょっと、その（＝フィラー）、点（＝小数点）いくらのところ {うんー [A40f]} で、あの一、金額が 1 円のずれが出ちゃうことがあるんです {うんー [A40f]} ね、先生の請求で {ああ [B30f]} =。

C40f =だから、ほんとは {ああ [B30f]} 700 円なんですけど、請求段階で、け（＝「計算」の 1 拍目）、よくよく計算すると 701 円になってたりとか {うんー [A40f]} ある。

C40f ＜沈黙＞だから＝、

A40f =ま（＝まあ）、★それが本体価格かどうかという####して//。

C40f →ま（＝まあ）、まだでき、る限り、その←★700 円は本体価格で、プラス 35 円、税別っていうほうが {うーん [B30f]}、[事業名 1] システムのシステム的に {うんー [A40f]} 計算←★が得意//。

B30f →そうですね（＝91 発話文に応じた発話）←。

A40f →まあ、あるいは、と←《92-2 発話文に重複》にかく本体価格がいくらっていうのが決まっていればいいよね。

C40f ★そうですねえ。

A40f →700 円じゃなくて←も、例えば 600、80（＝「680」を切って言う）★何円（なんえん）なのか＜笑い＞、うん。

B30f →ああー、税←込みなのかどうか★を、はい。 (場面番号 40F202 発話文番号 90-98)

(16) は、(15) と同じ場面で、企画の打ち合わせと休暇連絡が済み、返金のクレームに話題が移っている。目上の A40f が、キャンペーンはサービスとして＜上質＞で理想的だと言及している。

(16) 目上→目下<上質>

- D20f んで一、一応、な（＝「何か」と言いかけたか）、[会社名 1] の、あの、オンラインショップの一 {うんー [A40f]}、ところを見たら一、通教（つうきょう）（＝通信教育）に【誰かが咳をする】に関して承ってるけれども、単品とか一 {うーんー [A40f]} 書籍に関しては返金は受け、付けないらしいんですよ、あの、不良品とかじゃない限り {うーんー [A40f]}。
- D20f なんで（＝なので）、ちょっとそれも {うん [A40f]} 紹介はできなかったんで。
- A40f うん。
- A40f うん、まあ、でも、今後も突如起こる、かもしれないし、ま（＝まあ）、キャンペーンが、こ（＝「今後」の 1 拍目か）、起こること自体は??、ま（＝まあ）、あの一、ま（＝まあ）、それはサービスとして、こう、いいので一、しかも、こう、じゃあ、事前に、ま（＝まあ）、分かってるもので??、い、言（い）えることもあるかもしれないですけども、そうじゃない、決まってない段階では、やっぱりこう言（い）えないと思うので、まあ、【息を吸う音】これがまあちょうど、まあ精一杯の対応かなとは思います＝。
- A40f ＝まあ、でも、昨日はありがとうございました。（場面番号 40F202 発話文番号 130-134）

(17)、(18) は、塾講師 A50f が親しい裂き織りの先生 B60f と布の販売について雑談を交えながら相談している場面である。(17) は、A50f の発話を引き継いで B60f が評価を述べている。(18) は、目下の A50f が「いいと思う」と、対象への評価を感想の形式に包んで「いい」を使用している。これに対して、目上の B60f は共感を示しながら「いい」と、評価を直接的に述べている。但し、意味について布の品質が<上質>なのか、売り物として<適切>なのかは判断しかねた。

(17) 目上→目下<上質/適切>

- A50f あ、先生、これ、あの一、生徒さんなんか、
- B60f うん。
- A50f 見せるんだったら、これは、わりあい//。
- B60f ああ、いいよね。 (場面番号 50F303 発話文番号 330-333)

(18) 目上→目下<上質/適切>

- A50f これはね、いいと思うんですよ、、
- B60f ねえ。
- A50f 品物が。
- B60f うん。
- A50f だから、<少し間>これは//。
- B60f これよりね、、
- A50f はい。
- B60f こっちのほうのがいいよね。
- A50f うん、絶対、絶対。 (場面番号 50F303 発話文番号 379-1 -385)

3.2.2 目下から目上に使用された「いい」

次に、目下から目上に「いい」が使用された場面を見ていく。(19)は、(15)、(16)と同じ場面で、進行中の企画について受注料金をどのように説明するか相談している談話である。年上で上司の A40f がいる場面で目下の B30f が電話での対応を<許可>している。

(19) 目下→目上<許可>

B30f 69 まあ、<少し間>でも、多分、確認とかいろいろ出てくるので、その時点 {うーんー [A40f]} で電話で言 (い) っちゃってもいいですけどね {うーんー [A40f]}、「合計金額がいくらいくら {うーんー [A40f]} になりますので」って {うーんー [A40f]} というふうに。

A40f 70 そう★だね。

B30f 71 →そんな←何件もないと★思う##。

A40f 72 →そう←だよ。

A40f 73 じゃあ、そうしよう {うん [B30f]}。 (場面番号 40F202 発話文番号 69-73)

(20)は、(17)、(18)と同じ場面である。A50f が目上の B60f に「と思う」などの感想の形式に包むことなく、<許可>を示している。ここで注目したいのは、染色をしない B60f が染色をする A50f に白い生地 of 布の扱いについて相談している点である。どちらかといえば A50f の専門領域にあたる話題であり、目下であっても評価を直接的に示しやすかったと考えられる。但し、2 回目と 3 回目の「いい」については、売上の歩合について<許可>しているのか<適切>だと評価しているのか判断しかねた。

(20) 目下→目上<許可>・<適切/許可>

B60f 347 あたしは、染められないから、あなたが買って↑。

B60f 348 じゃ、あたし、★あなたが売れたので。

A50f 349 →はい、いいですよ←。

B60f 350 ★30 (さんじつ) パーセント、あたしにいただいたものをあなたにあげる。

A50f 351 →いいですよ、いいですよ、はいはい←。

<許可> <適切/許可> (場面番号 50F303 発話文番号 347-351)

(21)は、大学教員 A50f が親しいゼミの学生 B20f と教育実習の企画について雑談を交えながら相談を受けている場面である。学生 B20f がゲストスピーカーにある人物の話が適切だと評価し、時間の長さについても 30 分程度が適切だと話している。ここで注目したいのは、B20f がこの場にはいないゲストスピーカーに対して評価している点である。目下の B20f が目上の A50f への評価として「いい」を発話したわけではない。

(21) 目下→目上<適切>

B20f で、そこで、何 (なん) か子どもの進学とかやってる、ひ (=「人」と言いかけたか)、方 (かた) がいて {うん [A50f]}、もうまさに専門の方 (かた) がいてー {うん [A50f]}、その人に話を聞けたらいいなと思っ、一番。

A50f ★ふうん。
 B20f →い（＝何を言いかけたか不明）、さ←んじゅっぶん（＝30 分）でもいいんで、話してほしいんですけど。
 A50f え、それは何（なに）？↑。
 A50f 実習の中で？↑。
 B20f はい。
 A50f あ、そうゆうのもある★の？。
 B20f →あ←、各グループみんな、みんなじゃないけど、ゲストスピーカーを、大体呼んでます。
 （場面番号 50F103 発話文番号 124-131）

（22）は、塾講師 A50f が親しい印刷店員 B30f と店先で原稿や郵便局の手続きについて雑談している場面である。年下かつ店員で目下の B30f が適切さを評価している。しかし、前後の文で引用の形式をとっており、一般的にそういうものだという評価を提示しているのにすぎない。

（22）目下→目上＜適切＞

A50f ＝だから、あの、＜少し間＞運転免許とっというて一番よかったのは、身分証明に使えること。
 B30f あ、そうですねえ。
 A50f うん。
 B30f 顔写真（かおじゃしん）、ちゃんと入（はい）ってるしね＝。
 A50f ＝そうそう、で//。
 B30f 間違いないですよ＜笑い＞＝。
 A50f ＝そうそうそう、顔写真（かおじゃしん）入（はい）ってない保険証だと、
 B30f うん。
 A50f ちょっと落ちるのね、だから。
 B30f うん。
 A50f これ、顔★出してる。
 B30f →そう、顔写真（かおじゃしん）ね←、言（い）いますもんね＝。
 A50f ＝うん、言（ゆ）うもんね、あっちがね。
 B30f うん、あるほうがいいって＝。
 A50f ＝そ、そう。
 B30f 言（い）われますもんね＝。
 （場面番号 50F302 発話文番号 142-156）

（23）は、（17）、（18）、（20）と同じ場面である。（18）と同様に A50f が「いいと思う」と、対象への直接的な評価を感想の形式に包んで「いい」を使用している。なお、ここでも＜上質＞と＜適切＞どちらを表しているのか判断しかねた。

（23）目下→目上＜上質/適切＞

A50f で、あたし、あの一 {うん [B60f]}、ほら、皆さんが、ブラウス作るってやつ↑、

B60f うんうん＝。

A50f ＝あれはいいと思うんですよ。(場面番号 50F303 発話文番号 300-1 - 300-2)

(24) も、(23) と同じ場面である。(24) は、目下の A50f が工房にスタンプの作成を依頼したことを話す談話である。「笹野台」と依頼したのに「笹野合」と間違っ
て掘られたスタンプが届き、A50f が自分で「合」の右側の斜辺を削り「台」に修正したことを述べた後、スタンプの木の材質が＜上質＞だと評価している。

(24) 目下→目上＜上質＞

A50f だから、ほら、まさ目がいいって、知ってる人は知ってるんだけど＝。

A50f ＝あと、スタンプ買わなきゃ駄目、先生、こうゆう＜少し間＞スタンプ、シャチハタは高いから。

B60f うん。(場面番号 50F303 発話文番号 129-131)

以上の使用実態から、「いい」の使用には目上が目下に直接的に使用する傾向が見てとれた。目下から使用される場合には、「いいと思う」や「いい気がする」、「いいかもしれない」のように自身の感想であることを形式的に明示したり、「いいですし～」として文を続けて間延びした印象を与えたりすることが多かった。「いい」の意味と話し手の関係を表 2 にまとめる。＜上質＞、＜許可＞のいずれも、わずかながら目上から目下に用いられるほうが多かった。＜適切＞では、目下から目上への使用が多い。また、目上から目下への使用が＜許可＞に偏っていないことが見てとれる。「いい」が＜許可＞以外でも目上から目下に用いられていることから、ヒエラルキーが暗示される現象は、語の意味によって形成されているわけではないといえる。

【表 2】述部で使われる評価「いい」の意味と話し手の関係

意味 用法	上質	適切/ 上質	適切/ 許可	許可	計	
評価(述部)	3	3	45	12	8	71
目上→目下	2	1	19	7	6	35
目下→目上	1	2	26	5	2	36

4. 談話レベルにおける評価形容詞の対人関係調整機能

西尾(2015)は、上司や先輩などの上の立場にいる者が後輩や部下を「下位者」として扱いながら、すなわちマイナスに待遇しながら、庇護・教育などの配慮を目的とした対人行動を行うとしている。また、これにより「面倒見がいい」という称赞混じりの肯定的評価を受けることができるという。このようなマイナスの待遇表現行動は、相手に悪い感情を与えず、秩序ある対人関係や集団の構築に貢献する。本稿の分析から、「いい」の対人関係調整機能は、聞き手を下位者に扱う表現に位置付けられる。翻って、下位者が上位者に使うことが円滑なコミュニケーションの障壁になりうる。言語行動が待遇表現として様々な機能することに、形容詞「いい」や「悪い」も例外なく寄与していると考えられる。

はじめに述べた「忙しい」は、自分の状況の評価であるため「いい」と異なるタイプのように

思えるが、「忙しい」も「悪い」も客観的評価を目下が呈することが問題となるという統一的な説明が可能である。(25b)は、理由を付加することが客観性を強化することにつながり、不遜さを回避できる。(26b)は、「悪い」という客観的評価を謝罪にすることで、客観性の根拠を免れている。いずれも、客観的評価の提示がマイナスの待遇に傾くという同じ枠組みで説明できる。

- (25) a. 今忙しいんです。
b. 今パソコンがウイルスに感染してて忙しいんです。(1) 再掲)
- (26) a. 悪いんですけど、手伝ってくれますか。
b. 申し訳ないんですけど、手伝ってくれますか。(2) 再掲)

水谷(2015)では、日本語と英語との対照から、英語では問題がないのに、日本語に置き換えると失礼になったり違和感を与えたりする表現に(27)をあげている。失礼になる理由として、「上手」という評価に敬意が含まれないことをあげている。回避するためには、「勉強になりました」、「感銘を受けました」のように自己に引きつけて述べる必要がある。日本語で直接的に評価しにくいのは、目上を評価しないという習慣が強いからだと説明している。

- (27) a. 先生、ジョーズニ教エマシタ。(水谷 2015:125)
b. 先生、よく教えました。(水谷 2015:108)

本稿では、「いい」が<許可>以外でも目上から目下に用いられやすいことから、ヒエラルキーを暗示する談話ルールが形容詞の意味によって形成されているわけではないことを確認した。さらに、このルールは、社会的な関係性に基づく絶対的なルールではなく、その場における専門性の推移に応じて相対的に変動すると考えられる。このことは、(20)に見たように、目下であつても専門領域にあたる話題であれば、評価を直接的に示す振る舞いに見てとれる。これにより、清水(2013)による趣味など、仕事・専門以外をほめる場合は失礼にあたらないという説と、柴田(2005)による目上の得意分野であれば仕事・専門以外でも失礼になるという説の食い違いを説明することができる。(28)を発話する人物が目下であつても、上司と同様にテニスに興味であり、また上司よりも熟達している場合に(28)は不遜に聞こえない。同じ訓練に励む同志から技術の向上を讃えられたと捉えられ、聞き手に嫌な印象を与えないと思われる。

- (28) 課長はテニスがお上手ですね。

5. おわりに

従来、マナーの観点から指摘されてきた形容詞の使用特徴を談話ルールの俎上に上げ、語レベルにとどまらず、談話における制約が働いていることを論じた。今後の展望として、談話ルールにあてはまらない形容詞の分類を明らかにすることがある。まず、形容詞でも(27b)のように自己に引きつけて述べる事が可能な形容詞がある。次に、(28)のように、客観的評価を表すが、対人関係調整機能に作用しない形容詞も存在する。どのような形容詞が談話ルールから免れるのか、分類を設ける必要がある。

- (27) a. 先生の授業はいいですね。
b. 先生の授業を受けられて、うれしいです。
(28) 先生、お顔が青いようですが、どうかされましたか。

【参考文献】

- 石黒圭 (2017)『形容詞を使わない大人の文章表現力』東京：日本実業出版社。
国広哲弥 (1997)『理想の国語辞典』東京：大修館書店。
梶浦恭平 (2013)「「よい」の曖昧性とアドホック概念構築」西山佑司(編)『名詞句の世界』pp.471-495. 東京：ひつじ書房。
現代日本語研究会(編) (2016)『談話資料 日常生活のことば』東京：ひつじ書房。
小林美恵子 (2016)「調査の概要」現代日本語研究会(編)『談話資料 日常生活のことば』pp.1-27. 東京：ひつじ書房。
佐竹久仁子 (2016)「文字化の原則」現代日本語研究会(編)『談話資料 日常生活のことば』pp.29-40. 東京：ひつじ書房。
齋藤孝 (2017)『大人の語彙力ノート』東京：SBクリエイティブ株式会社。
柴田謙介 (2005)『ものは言いようで腹が立つ』東京：サンマーク出版。
清水崇文 (2013)『みがけ！コミュニケーションスキル 中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話』東京：スリーエーネットワーク。
高梨信乃 (2010)『評価のモダリティー現代日本語における記述的研究ー』東京：くろしお出版。
中村明 (1991)『レトリック体系表ー日本語レトリック一覧ー』東京：岩波書店。
西内沙恵 (2018)「評価形容詞の意味分類ー「いい」を事例にー」『日本認知言語学会論文集』18, pp.13-25.
西尾純二 (2015)『マイナスの待遇表現行動ー対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮ー』東京：くろしお出版。
水谷信子 (2015)『感じのよい英語・感じのよい日本語ー日英比較コミュニケーションの文法ー』東京：くろしお出版。
八亀裕美 (2003)「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15, pp.13-40.
山田進 (2000)「「いい」の意味論ー意味と文脈ー」山田進・菊池康人・靱山洋介(編)『日本語 意味と文法の風景ー国広哲弥教授古稀記念論文集ー』pp.125-141. 東京：ひつじ書房。

- Dixon, R. M. W. (2004) “Adjective Classes in Typological Perspective”. Dixon, R. M. W. and Aikhenvald, A. Y. (eds.) *Adjective Classes: A Cross-Linguistic Typology*. 1-49. Oxford: Oxford U.P.
Katz, J. (1966) *Philosophy of Language*. New York and London: Harper & Row.

【参考辞典・辞書】

- 飛田良文・浅田秀子 (1991)『現代形容詞用法辞典』東京：東京堂出版。
IPAL『計算機用日本語基本辞書』情報処理振興事業協会 (IPA) .